

## \*京都府青少年育成協会会長奨励賞

### 「支援の「ほんとうの意義」」

亀岡市立東輝中学校 3年  
西ヶ開 麻衣

「震災から5年」今年の3月、みなさんもこの言葉を何度も目にしたことだろう。私はこの言葉を見るたび、釈然としない気持ちになる。これでは、5年前に震災は終わった、そんな印象を受ける。震災の影響は五年経った今でも強く残っているのに。未だ残るガレキの山、仮設住宅で生活する人々、難航する原発の除染活動。東日本大震災からの復興は、全然進んでいない。震災は、まだ終わっていないのである。

私の所属する東輝中学校の生徒会本部では、震災に対する支援の取組を行っており、本校ではこれを「銀杏の取組」と呼んでいる。震災当初から続くこの取組では、本校の校庭にあるイチョウの木から毎年大量に採れる銀杏の実を利用している。生徒会本部を中心に銀杏を拾い集め、実をむき中の食用部分を取り出して洗う。そうしてきれいになった銀杏を本校のPTA行事「おいでな祭」で販売し、その売り上げ金を教育義援金として福島県双葉町へ送っているのだ。この双葉町は、原発事故の影響で家へ帰れずにいる人が大勢いる。この取組では全町民の助けになるほどの大金は集められないので、自分たちに身近な中学生へ義援金を寄付することになった。銀杏の取組を発案したのは当時の生徒会長で「自分たちにできることがしたい」と周囲に訴えて今も続く取組を作りあげた。

私は1年生のころ、この取組があるのは知っていたが、何のためにやっているかまでは考えなかった。2年生になり生徒会本部の一員として取組に参加して、ようやく取組の意味を知った。しかし、私は「被災地の人のために」という意識はあまり持てずにいた。自分たちの活動が双葉町の人たちにどのような影響を与えているのか全くわからず、手応えを感じるができなかったからだ。

そんな思いが一変したのが2年生の12月。おいでな祭が終了して1ヶ月ほど経ったころだった。双葉町の町長さんと教育長さんが、「仕事で近くまで来たので」と突然来校してくださったのだ。私たち生徒はタイミングが悪くお会いすることができなかったが、「自分たちの取組は双葉町へ届いている。」そう初めて実感できた出来事だった。また、そのときの生徒会長が来校に関してお礼の手紙を書いたところ、教育長さんご本人から便せん数枚にわたる直筆のお返事をいただいたのである。そこには本校に来てくださったときの感想、そして私たちが行っている支援に対する感謝の言葉が丁寧に書かれていた。全校集会で校長先生によって読み上げられる手紙を聞きながら、私の心は感動に満ちていた。「自分たちの活動は役に立っている。東輝中学校と双葉町はつながっている。」そう思えたとき、私は支援の「ほんとうの意義」がわかったような気がした。支援というものは、相方の間に交流が生ま

れたときはじめて意味を成すのだ。

たくさんのボランティア団体などが現在も復興のため支援活動を行っている。これらの取組は本校で行っているような小さなものからかなり大規模なものまで様々であるが、そのどれにも共通して大切だと言えることがある。それは「支援する側と支援を受ける側が互いに交流すること」だ。支援とは決して一方的なものであってはならない。支援する側が相手の状況もわからずに物資を送っても、ただ邪魔な荷物を増やすだけのときがあるし、支援を受ける側も、支援してもらうのが当然とばかりに色々要求するのはおかしい。相手を思いやる気持ちや感謝の気持ちが相方に届き「共に復興していこう」と心が一つになる。これこそが、支援の本来あるべき姿ではなかろうか。

私は、銀杏の取組を通して生まれた本校と双葉町との交流を大切に、今年の秋も取組に励もうと思う。そして、ほんとうの震災の終わりまで支援活動が続けられるように、この取組の意義を、築かれてきた交流の大切さを、しっかりと後輩たちに伝えていくことをここに誓う。